

## 本学卒業生の卒後10年目の“看護活動”の状況と考察

明石, 久美子

<https://doi.org/10.15017/240>

---

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 22, pp.19-25, 1995-03. Kyushu University School of Health Sciences Fukuoka, Japan

バージョン :

権利関係 :

# 本学卒業生の卒後10年目の“看護活動”の状況と考察

明石 久美子

## Nursing activity at ten years after graduation from Kyushu University, School of Health Sciences

Kumiko Akashi

The purpose of this study is to follow the educational effect on graduates of the Nursing Department of Kyushu University School of Health Sciences.

Questionnaires about nursing activities have been sent to eighty graduates at ten year after graduation, of whom 57 graduates have answered.

Forty-four of 57(77.2%) have still kept nursing activities. As for nursing activities thirty — seven of 57(64.9%) have been engaged in clinical nursing including public health nurse, midwife and nursing teacher. Two have studied in advanced course for nursing. Five have worked at home for child health and education, and studied for special course as ambulance. Most of the graduates appreciate the education of Alma Mater to keep their activities and they hope to be filled up from 3 year's course to 4 year's.

### 1. はじめに

教育は、現在目の前にあるものがすぐに効果を現すことよりも、学習者の内なるものに何らかの刺激を与え、それをきっかけとして学習者自身が自ら学習し伸びることを期待し行われることが多い。特に大学での教育は、学生の能力・個性などによりその効果発現の時期は大きく異なる。

看護に興味を抱き、看護学や技術の習得を目的に九州大学医療技術短期大学部看護学科(以下本学とする)で3年間を修了した卒業生は、社会に出てどのように本学での学習を生かし、生活しているのだろうか。本学での教育効果を評価する意味も含めて、卒業生の現在の生活状況と学習意欲について調査することにした。今回は、社会人として一通りの経験を積み、教育効果が現れた頃ではないかと思われる本学卒業後10年目にあたる卒業生を対象とした。

ここでは“看護活動”を、看護専門職としての就業、看護の発展的学習としての就学、家庭におけるの広い看護に関する活動とし、その状況から看護教育のあり方を考える。

### 2. 調査方法

卒後10年目にあたる本学第12回生(1985年3月卒業)80名を対象に調査票(資料参照)を郵送。簡便さを考慮し回答用ハガキを添付し、返送を依頼した。

なお、同窓会名簿の作成も兼ねたため、記名とした。

調査は、1994年10月に実施した。

### 3. 結果

回答数は57、回収率は71.3%であった。

#### 1) 回答者の背景

全員女性。年齢は30~33歳。(平均年齢30.9才)

現在の居住地は九州40名(70.2%)、そのうち福岡県内27名(47.4%)、関東7名、中国5名、関西3名、東北・北陸各1名であった。尚、回答者の出身、就業状況と併せて図1に示す。

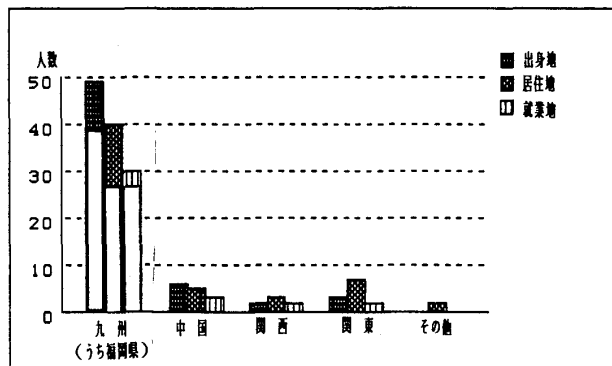


図1 出身地・居住地・就業地

既婚者は42名(73.7%)であり、有子者は32名(56.1%)であった。子の年齢の幅は0歳から8歳で、半数以上は3歳未満であった。

2) 看護活動の状況

看護専門職として就業37名、就学2名、家庭での活動5名と合計44名(77.2%)が活動していた。

(1) 就業状況

a. 就業率と地域、家庭状況

33名(57.9%)が常勤、4名(7.0%)が非常勤で合計37名(64.9%)が就業しており、20名が就業していなかった。(図2)

就業地域は、30名が九州で、有職者全体の81.1%を占めている。うち福岡県内は27名(73.0%)であった。

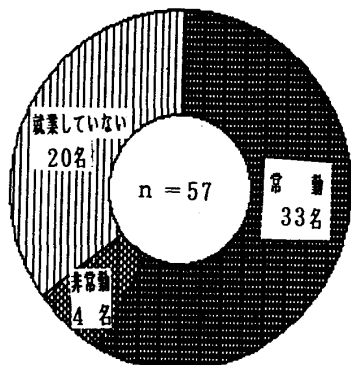


図2 就業状況

また、既婚者で就業しているものは22名(既婚者全体の52.4%)、うち15名には子があり、これは有子者の46.9%に相当する。

b. 職種

就業者37名全員が看護専門職に就いていた。

内訳は、本業として看護婦25名(回答者の43.9%、有職者の67.6%)、保健婦5名、助産婦4名、看護教員2名、養護教諭1名であった。(図3)

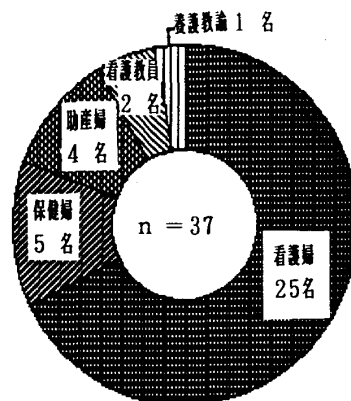


図3 職種

看護婦の中で、教育婦長1名、副婦長3名、看護専門学校非常勤講師兼任1名と役職を担っている者もあった。

なお、九州大学医学部附属病院・九州大学歯学部附属病院(以下合わせて九大病院とする)勤務者は14名であった。回答者のうち卒業直後に九大病院に勤務した者は34名で、九大病院10年定着率は41.2%である。

(2) 卒業後の進学状況

卒業後進学した者は合計25名(重複あり)で43.9%であった。内訳は、保健婦コース11名、助産婦コース6名、看護教員養成コース2名、4年制大学看護学部編入学1名、大学の養護教諭特別々科1名、大学の通信教育部社会福祉学専攻・心理学専攻各1名、歯科大学1名(現在就学中)、放送大学1名(現在受講中)となっている。看護大学編入学、放送大学については、他にも進学・受講を希望し

ている者があった。放送大学で学習中の者は、「将来、看護学士の資格を取得したい」と目的を明確に記載していた。

(3) 家庭での活動

非就業のうち、家庭において看護に関する活動をしている者が5名あった。活動の内容は、小児看護から発展して絵本づくり、さらに文学についての学習2名、医療事務、救急救命士の資格取得、外国転勤のため語学及び当地の医療についての学習、各々1名であった。

3) 現在の生活で、医療短大での学習が役立っていること

日常生活・勤務上・その他の三つの場面に大別して、自由記述欄記載内容は下記の通りであった。

日常生活上では、家族の健康管理。妊娠・出産・育児の際に経過の予測ができ不安が少ない。知人の健康相談を受けられる。病気の際、専門書の利用・活用ができる。急病・負傷時に応急処置ができる。

勤務上では、毎日の業務に全て生かされている。しかし、専門看護については臨床に出たからの経験によるものが大きい。

その他、抄録や記録物の記載経験で“書くこと”に慣れた。清潔の観念が身についた。

4) 学会・研修会での発表や研究について

35名(61.4%)が研究テーマを記載していた。院内研究でのテーマが多かった。内容は、就業している部所に応じたものがほとんどであった。

5) 現在の学習に関する意識

現在学習に関して「全く考えたことがない」は5名(8.8%)あったが、「考える余裕がない」18名(31.6%)のうち13名は他の項目にも重複して回答している。47名(82.5%)が学習意欲を示し、複数回答も多く、学習したい内容は多岐に渡っていた。これは就業や婚姻の有無には関係していなかった。具体的には、「短大の内容をもう一度」22名(38.6%)、「看護の知識をより深く」34名(59.6%)、「一般教養(語学・文学・

心理学等)」28名(49.1%)、「通信教育・放送大学」8名(14.0%)であった。その他自由記述欄に、看護診断、栄養学、日常の業務に関連した研究、東洋医学、資格取得があった。(図4)

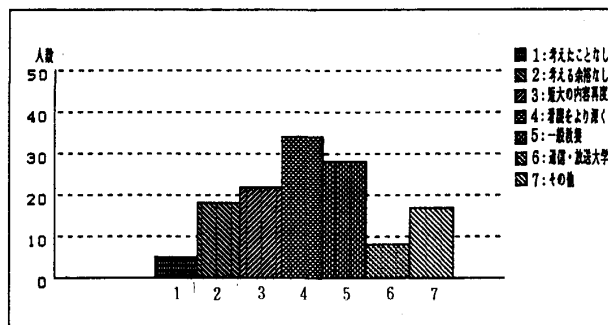


図4 現在の学習意欲 (複数回答)

6) 現在の生活に対する満足度

ここでは、現在の生活の何に対しての満足かを明確にしなかったため、漠然としていて回答ができないというものがあり、この項のみ有効回答数は55となる。

「非常に満足」7名、「まあまあ満足」36名を合わせると78.2%が現状に満足していた。有職者37名をとってみると「非常に」「まあまあ」合わせて28名が満足しており、うち有子者14名では、合わせて13名が満足していた。一方「少し・非常に不満足」の12名の中には、家事・育児のために自分の時間が持てない、時間に追われ研究心に欠ける、という理由があった。このうち有子者は4名である。

7) 本学の教育に関する意見・要望

自由記述には34名(59.6%)の記載があった。その論点は、三年制教育、卒後教育、四年制教育に関するものであった。

現行の三年制教育に関しては、「実習をより充実したものに」と数名の意見があり、「1年次より臨床実習を行った方が意識が高まり理論と関連づけやすい」「就職直後は技術面で苦労したので実践で役立つ技術をもっと身につけてほしい」と自分の体験を通しての意見があった。また「専門職としての意識を高める教育を」「喜び・きびしさも教育してほしい」というものもあった。これは、実習生や職場の

若い後輩の看護専門職としての意識のなさを憂慮し、それぞれの立場でもっと責任を持って積極的にやってほしいというものである。さらに「入学時の適性検査の必要性がある」もあった。他に「看護研究についてもっと詳しく学びたかった」と4名が記していた。また自由な雰囲気や教育内容全般を支持するものも多数あり、「技術よりも考え方を身につけた」「問題を追求する基本を学べた」として評価されていた。

卒業教育に関しては、母校が夜間大学・通信大学・聴講制度などで卒業生を受け入れてほしいとの要望を3名が記していた。

さらに、「学士を取得する」「しっかりとした基礎教育を行う」「臨床実習を増やす」「専門学習をして専門ナースを育成する」「多岐に渡る看護の分野を学習するには3年では時間不足」等の理由で、四年制への移行を要望する意見も8名より出されていた。

#### 4. 考 察

看護教育の四年制化が課題となっている現在、単なる技術教育でなく、看護教育を受けた者としての自覚を持ち続け、生涯に渡って学習しようとする人材を育成するのも大学教育の目標の一つであると考えられる。本学は、三年制でありながらも、学生自身がじっくりと“看護”とは何かを考える機会を持つような教育がなされ、実習も技術の詰め込みに終わらないよう工夫されている。現役の学生時代にはそれが実感できなくても、10年程経つ頃には実感できるようになるものだということが、今回自由記述により明らかになった。

就業状況について見てみると、1993年の日本看護協会の調査では、看護系四年制大学卒業者の31歳以上の就業率は看護専門職65.1%、看護職以外5.6%合わせて70.7%<sup>3)</sup>、卒業10年目としては1984年聖路加大学の卒業生調査で61%との報告<sup>4)</sup>があり、今回の結果(64.9%)とほぼ同じであった。

1994年奥村は、看護系四年制大学卒業生(以下看護系大卒者とする)と看護系以外の大学卒業女

子(以下女子一般大卒者とする)の無職者の比率を比較し、卒業10年目では看護系大卒者24.7%、女子一般大卒者50.6%と大きな差があり看護系大卒者の就業率が高いことを報告している<sup>5)</sup>。また菱沼らは、1992年に聖路加大学卒業6~10年目の就業状況を調査し、就業していない最大の理由は育児のためとしながらも、婚姻や育児より就業率に影響する他の要因の存在を示唆している<sup>6)</sup>。今回の調査結果でも既婚者・有子者の約半数は就業していることがわかり、やはり就業に影響している要因は育児以外にもあると考えられる<sup>7)</sup>。

三年制看護短大、専修専門学校等の卒業10年目の時点での報告が明らかでないため、ここでは看護教育の内容の違いによる比較はできないが、一般に四年制大学を卒業した女子は、職業継続の意志が収入の動機よりも自分の能力を発揮する場であることで支えられていると言われ<sup>8)</sup>、その中でも“看護”という専門の能力を身につけた看護系大卒者は、自分の能力を十分に発揮しようとしてより多くの者が就業し続けていると言える。

さらに看護婦の就業意識を調査した小澤らの報告では、職業に就くことは「経済的に楽になる」「自分が成長する」「新しい知識を得る」とことと関係が深く、「自分が成長する」とは「ものの見方や考え方を広げること」とするものが多い<sup>9)</sup>。また、この「自分が成長する」という意識は就労期間の長期化や出身校の高学歴化により促進される<sup>10)</sup>とある。波多野らは、看護婦は専門職業人として、看護という職業や役割に結びついた行動や価値観を内在化し、職業集団に一体化して行く<sup>11)</sup>としている。これを本学卒業生の実態と照らし合わせてみると、学習する態度、看護教育に関する考え方等の回答の内容より自己成長をしながら看護活動をしている姿が見えてくる。つまり、卒業10年目の現状の中で「看護を深めたい」「さらに学習したい」という表現が多く見られ、積極的に就業していることがわかる。

また今回の調査では今後の就業について継続・復帰の意志を問わなかったが、年令的にも責任ある地位で指導的な役割を担う機会がこれから

は増してくることが予想される。その中で自己の能力を最大限に発揮し成長し続けて行こうとすることも十分に予測できる。

さてここで九大病院就業者に着目しその定着状況を見てみると、本学第1期生(1974年卒)の卒後5年目の定着率が17.9%という報告<sup>10)</sup>があるが、今回12期生(1985年卒)の卒後10年目では41.2%となっていた。これは、保育環境等を含めて社会的に労働条件が以前よりも数段改善されたことも大きな要因であろうが、1期生の低い定着状況に関して問題とされていた“専門職業人としての意識”が高まり、“本学での看護教育・職場での卒後教育のあり方”等が軌道に乗り期待に沿ったものになってきた、と捉えても良いのではないだろうか。九大病院就業者は、複数の研究テーマを持ち、学習に関する回答も積極的なものが多く、教育機関でもある大学病院において常に後輩の看護学生の姿を目にしながら自己成長を遂げてきたのではないかと考えられる。

次に卒業生の学習態度については、進学した者が25名(43.9%)あり、他にも看護大学編入学を予定している者、子どもの成長や放送大学の地方での受講機会拡大など条件が整えば進学することを考えている者もあり、同時に80%以上の高率で学習に対する意欲が示されたことは本学の教育効果が十分に現れたものであると考えられる。

1987年国立医療技術短期大学部看護学科卒業生の卒後7年目の学習意欲を調査した結果では、学習ニードは就労に影響される<sup>11)</sup>とあったが、本学卒業生は結婚等で退職した後も日常の家庭生活や育児体験により、以前にも増して身近に学習の必要性を感じている者もあり、今回の調査では就業に関係するとは言い切れないことがわかった。専業主婦である者の回答の中で、家族の健康管理をする上で専門書を活用し、栄養学の必要性を再認識し、妊娠・出産・育児の過程において母性・小児について再学習していることが目立った。さらに小児看護を通して、子どもの絵本づくりから文学を学ぶことへと学習の域が発展するものもあった。

一方就業中の者では、毎日の業務を自らまとめ、常に研究を重ねるなど、単なる技術教育を受けたのではなく幅のある考え方を身につけた成果を現していることが、回答より読み取れた。

本学への要望等を含めた看護教育に関するものでは、三年制教育の中での実習に対して、時期・内容についての意見や、職業的責任に対する教育が乏しいという指摘もあった。本学での学習を肯定的に捉えながらも、より一層の充実した教育を望む声を丁寧に受け止め、今後の本学での教育に生かして行かなければならない。

また卒後教育においても、職場に期待するだけではなく本学が取り組めることがあれば、同窓会組織等とも連携を取りながら、効果的な継続した教育を考えて行く必要があると考えられる。今回「聴講制度があれば良い」という意見が出ていたが、既存の学内制度(聴講生・研究生)の周知についても入学時に“学内案内”を渡すだけでなく、折にふれて広く行うよう改善する必要がある。同時に、九州大学箱崎キャンパスでの放送大学ビデオ学習センター利用についても、卒後福岡圏内に留まることの多い本学卒業生にとっては役立つ情報ではないかと考えられる。

四年制教育に関しては、卒後10年ともなると教育を担当する立場にあることも多くなり、教育職に就くときの資格として四年制大学卒業が基礎資格となってくることを切実に経験する者も出てくるようである。このことは、卒後10年目の問題として大きなものの一つであろう。資格以外の点でもそれぞれの現状の中で研究法や専門技術の修得等で必要性を実感し、看護教育の四年制化を望むものが出てきていることを最近の風潮として当然とするのではなく、実際の現場からの声として一つ一つに耳を傾け、看護教育に携わる者全員で取り組んで行かなければならない。

今回の調査では“四年制教育”に限定していなかったが、ここで得られた意見は1992年国立大学医療技術短期大学部看護学科(以下看護短大とする)連絡協議会の行った“看護短大大学化に関する意識調査”<sup>12)</sup>で報告された内容と、重なる点

もある。例えば、看護短大の四年制大学化について90%以上が賛成していたが、その主な理由は「幅広く学問や教養を身につけるべき」「看護の教育内容は既に高度のものであり、その教育は四年制大学で行うのが当然」というもので、本学卒業生も学問や教養を身につけたいという意識は高く、看護教育についても卒業後教育や四年制教育に対して要望している内容から見て、看護教育の四年制大学化に賛成するものとも捉えられた。

今回は卒業10年目の時点を経験を評価する一つの目安としたが、卒業直後からの経験等とも関連づけながら追跡調査を行ってみることも有効であると考えられる。また今後、大学教育を考えて行くために、二年制短大や専門・専修学校との比較も行い、看護活動の状況や看護観について検討する必要がある。

### 5. まとめ

九州大学医療技術短期大学部看護学科卒業後10年目にあたる卒業生を対象に、“看護活動”に関する調査を行い、以下の結果を得た。

1. 就業率は65%で、全員が看護専門職に就いていた。
2. 卒業10年間に進学した者は44%で、他にもさらに進学を予定している者があった。
3. 80%以上の者が看護の学習を深める意志を示しており、卒業後教育を充実させるよう検討する必要がある。
4. 看護教育のあり方について、四年制大学化への指向がみられた。
5. 多くの卒業生が本学での学習を生かし、教育の効果が現れていることがわかった。

### 謝 辞

本調査に協力いただいた学友に深謝する。

### 引用文献

- 1) 看護系大学卒業生の就業状況調査, 日本看護協会調査研究報告, 42: 37 - 91, 1993.
- 2) 聖路加看護大学創立70周年記念誌編集企画

委員会: 聖路加看護大学の70年: 196 - 199, 1991.

- 3) 奥村元子: 最近10年間の看護系大学卒業生の就業状況, 看護教育, 35(10): 784 - 787, 1994.
- 4) 菱沼典子他: 聖路加看護大学卒業より6 - 10年後の就業状況, 聖路加看護大学紀要, 20: 57 - 63, 1994.
- 5) 中野智津子他: 本学卒業生の動向 - 職場への適応状況と看護職への定着 - 神戸市立看護短期大学紀要, 11: 101 - 116, 1992.
- 6) 吉田昇, 神田道子: 現代女性の意識と生活: 119, NHKブックス, 1975.
- 7) 小澤道子, 上田礼子: 看護婦の教育と就労 - 職業意識による自己成長の概念 -, 東京都立医療技術短期大学紀要, 2: 135 - 139, 1989.
- 8) 小澤道子, 上田礼子: 看護婦の教育と就労(II) - 自己成長と職場環境 - 東京都立医療技術短期大学紀要, 3: 67 - 72, 1990.
- 9) 波多野梗子, 小野寺杜紀: 看護学生および看護婦の職業的アイデンティティの変化, 日本看護研究学会雑誌, 16(4): 21 - 28, 1993.
- 10) 滝沢美恵子他: 看護志望学生の動向と展望, 看護, 33(2): 48 - 53, 1981.
- 11) 村上生美他: 国立大学医療技術短期大学部看護学科卒業生の学習意識, 日本看護研究学会雑誌, 13(4): 84, 1990.
- 12) 国立大学医療技術短期大学部看護学科連絡協議会・同カリキュラム委員会: 国立大学医療技術短期大学部看護学科大学化に関する意識調査, 看護, 44(7): 178 - 188, 1992.

### 〈資料〉

#### アンケート

※回答は返信用ハガキにご記入ください。

- I. 現在の勤務先、役職、(常勤 or パート)を教えてください。
- II. お子さんは何人いらっしゃいますか?
  - ・さしつかえなければ、上から順に年令も教えてください。

Ⅲ. 医療短大卒業後、さらに進学されましたか？

Ⅳ. 現在の生活の中で、短大での学習が役立っていると思われるものがあれば具体的に教えてください。

例) ・子どもが病気した際に、小児看護学の本を見た。

・家族の食事療法の参考にしている。

・仕事上、全て役立っている。

Ⅴ. これまでに学会や研修会などで、発表・研究されたこと、また現在研究中のことがあれば、そのテーマを教えてください。

Ⅵ. 現在、学習に関して興味をお持ちですか？

〈複数回答可〉

1) あまり考えたことがない。

2) 学習する余裕がない。

3) 短大で習ったことを、もう一度習ってみ

たい。

4) 看護についてさらに知識を深めたい。

5) 一般教養(語学・文学・心理学等)を学びたい。

6) 通信教育・放送大学で学習中または受講予定

7) その他、具体的に……

Ⅶ. あなたは現在の生活に満足していますか？

1) 非常に満足している。

2) まあまあ満足している。

3) 少し不満である。

4) 非常に不満足である。

Ⅷ. 短大での教育に関して、ご希望やご意見などありましたら何でもお書きください。

☆ご協力ありがとうございました。